

地域を「学びのフィールド」にすることで、
学生と地域を結びつける英国の大学の取り組み例

ロンドン研究連絡センター

岡田 高文

1. はじめに

大学による地域貢献は、大学のあり方を考える上で重要な課題である。大学は地域に開かれ、地域とともにあるべきだという立場からすれば、大学が持つ人的資源である学生をキャンパス内に閉じ込めることなく、地域が抱えている問題の解決のために積極的に地域と関わらせることが重要である。

文部科学省では、平成 27 年度から、大学が地方公共団体や企業等と協働して、学生にとって魅力ある就職先の創出をするとともに、その地域が求める人材を養成するために必要な教育カリキュラムの改革を断行する大学の取組を支援することで、地方創生の中心となる「ひと」の地方への集積を目的として「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業」（COC プラス事業）を実施している。著者の所属大学である島根大学も同事業に採択され、学生にとって魅力ある就職先を創出するとともに、地域が求める人材を養成するために必要な教育カリキュラムの改革を推進しているところである。

本稿では、大学が持つ人的資源である学生を地域に関わらせる一手段として、ボランティア及びインターンシップにおける英国の大学の取り組みを調査し、考察を深めるものである。

英国の大学でボランティア及びインターンシップがどのように導入されてきたか、以下で簡単に触れる。

英国の大学におけるボランティア導入の経緯

まずはじめに、用語の定義を整理しておきたい。本稿で扱うボランティアとは、「自分の意志で奉仕活動や社会活動を行う人、又はその活動そのもの」である。

英国はチャリティやボランティアという慈善活動が盛んな国であり、街中に多くのチャリティショップを見かける。実際、社会福祉の歴史の中で、初めて組織的なボランティア活動が行なわれたのは 19 世紀の英国である。当時、ヨーロッパでは貧困者に対する国家政策は十分に行なわれていなかった。そこで、キリスト教信者による救済活動や、有識者が貧困者とともに暮らしながら感化・教育活動を行うセツルメント活動などが始まり、ボランティア活動へと発展していった。

近年では、少年が現実の地域社会の諸問題に実際にかかわり、他者のために活動することを通して、考え方や学び方、知識、技術、性向を身につけていくボランティア学習を、「市民教育」(Citizenship Education)という呼び方で推進しており、2002 年から社会への積極的な参加と責任を促す「市民教育」を中等学校で必修化した。

このように、ボランティア活動の土壌が整っている英国だが、それでは、大学ではボランティア活動をどのように取り入れていったのであろうか。

英国の高等教育の問題点を分析した **Dearing Report** (1997 年) では、知識社会である 21 世紀に英国の経済的な競争力を高めるために、国民の資質向上を目指し、高等教育への参加率を 50

パーセントまで高めるとともに、従来は高等教育機関に進学しなかった（進学できなかった）階層からの進学者を増加させる政策を重点政策として打ち出した。この政策は「高等教育参加者の拡大政策（Widening Participation）」と呼ばれている。これにより、高等教育の拡大化・大衆化は進んだが、その一方で、進学動機があいまいで勉学に励まず、学力が不十分な学生が増加した。そのため、大学は学生の学習意欲の向上に関心を向けざるを得ず、学習技能の指導や、学生の学習意欲を高める参画型学習（Active Learning）としてボランティア活動等を取り入れた。

英国の大学におけるインターンシップ導入の経緯

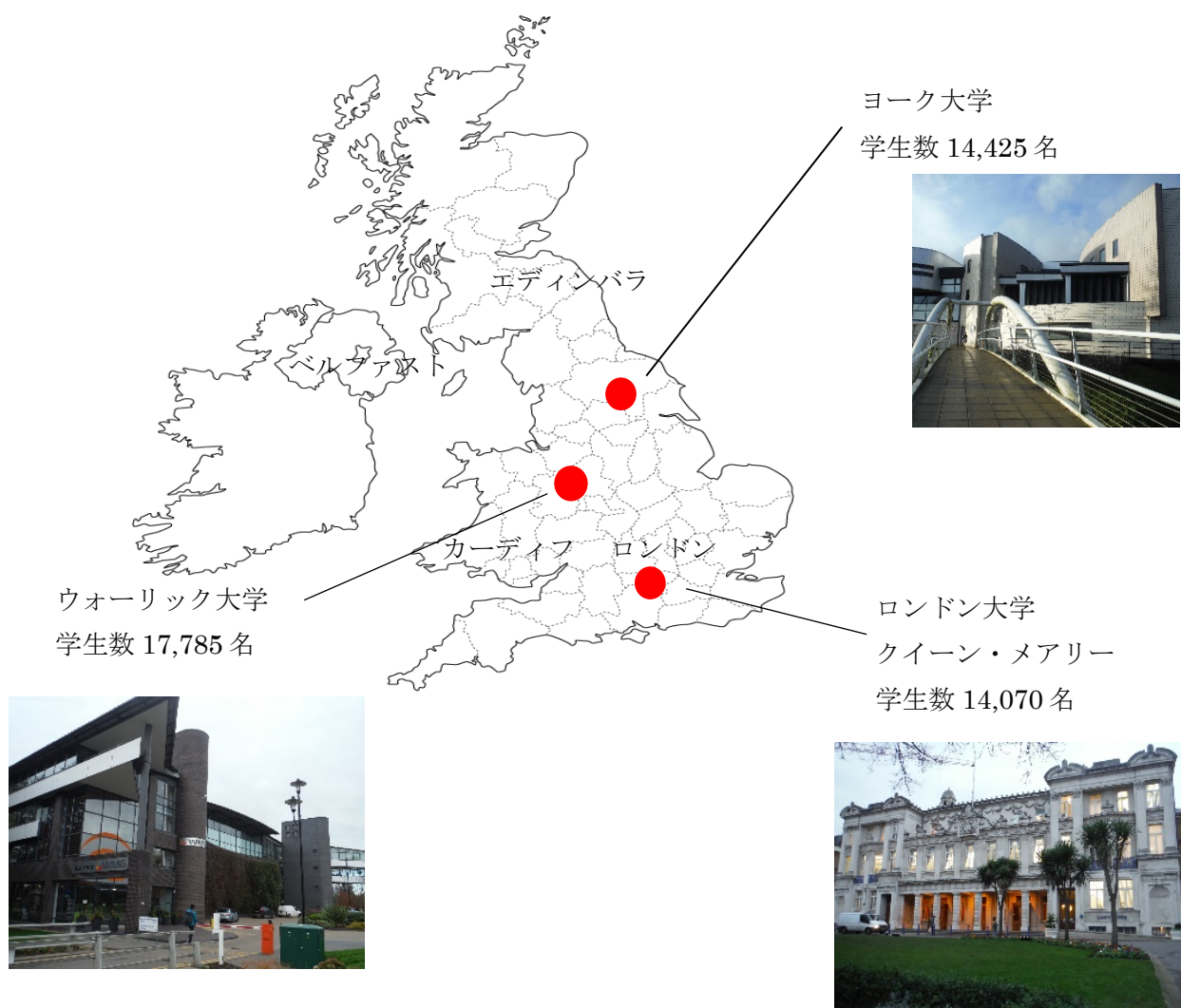
ボランティアと同様、まずは用語の定義から入る。本稿で扱うインターンシップとは、「大学生などが在学期間中に企業などで就業体験をすること」であり、これと同義のものについて、英国では「ワークプレイスメント」と呼ばれるが、本稿では、我々日本人になじみのあるインターンシップという用語を用いることとしたい。

英国の大学でインターンシップが行われるようになった背景として、大学を卒業しても就職できない学生が増加したことや就職と学問が分離してきたことなど、大学教育と就職の結びつきを強める必要ができたことが挙げられる。当初は、約1年間という長期に渡るプログラムであったが、現在のような、数週間から数ヶ月の比較的期間の短いプログラムが行われるようになったのは、前述の **Dearing Report**（1997年）の勧告に依るところが大きい。この勧告では、英国の国際競争力の低下を背景に、大学と産業界との連携を強化する方策を打ち出した。具体的には、大学に対して「すべての高等教育機関が学期中に学生が就労体験を行い、その体験を反映させることができるようなプログラムを拡充する」ように勧告した。すなわち、現在、英国の大学で行われているインターンシップは、学生側の利益だけではなく、産業界の実質的利益も重要なものである、と言える。

ボランティア及びインターンシップにおける英国の大学の取り組みに関して、次章で調査方法について、第3章で調査結果についてそれぞれ掲載する。

2. 調査方法

学生数が比較的同規模の、3つの異なる地域（ロンドン、イングランド北部、イングランド中部）の大学の担当者にインタビュー調査を行った。



●ウォーリック大学（2015年11月27日（金）訪問）

インタビュー回答者：

Ms. Helen Blunt, Warwick Volunteer Manager

（ボランティアについて回答）



大学の紹介

- ・学生数 17,785 名（内訳：学部生 12,395 名、院生 5,390 名）※Good University Guide2015 より
- ・ イングランド中部のコヴェントリーに位置する

地域（コヴェントリー）の特徴

- ・1890年代から自転車と自動車産業で栄えた地域であり、市内のコヴェントリー交通博物館で当時の繁栄振りを窺い知ることが出来る。また、同大学キャンパス内に設置されている WMG（産学連携に基づくイノベーションを促進するために英国政府主導で英国各地に設置された技術イノベーションセンターであるカタパルト(Catapult)の1つ）では、自動車会社大手の Jaguar や Tata も協力しており、自動車のバッテリー等の改良が進められている。



WMG 入り口



コヴェントリー交通博物館

●ヨーク大学（2015年12月11日（金）訪問）

インタビュー回答者：

Mr. Andrew Ferguson,

Assistant Director, Business, Community and Enterprise

（ボランティアおよびインターンシップについて回答）



大学の紹介

- ・学生数 14,425 名（内訳：学部生 11,245 名、院生 3,180 名）※Good University Guide2015 より
- ・ イングランド北部のヨークに位置する

地域（ヨーク）の特徴

- ・ 食品製造（特にアイスクリームやチョコレート）及びデジタルメディア産業に強みを持つ
- ・ 街の歴史が古く、多くの観光客が訪れる
- ・ 18 歳～30 歳が少ない（Ferguson 氏の意見： この年齢層は近隣の大都市（リーズやロンドン）

に出て行く人が多いが、その後 U ターンする者も多い。地域の魅力に自信がある。歴史がある街の強みだと思う。)



城壁で囲まれた旧市街

- ロンドン大学クイーン・メアリー
(2015年12月14日(月)、
2016年1月5日(火)訪問)

インタビュー回答者：

Mr. James Weaver, Employer Engagement Manager, Careers & Enterprise
(インターンシップについて回答)

Ms. Bronwen Eastaugh, Volunteering Coordinator, Queen Mary Students' Union
(ボランティアについて回答)

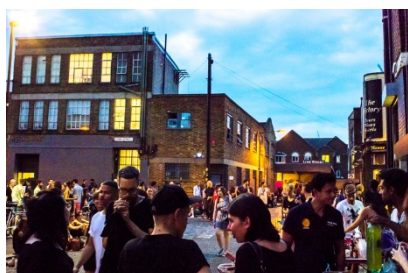


大学の紹介

- ・ 学生数 14,070 名 (内訳：学部生 10,950 名、院生 3,120 名) ※Good University Guide2015 より
- ・ ロンドン市内の大学で構成されるロンドン大学に属している
- ・ ロンドン東部にキャンパスを構えている

地域 (ロンドン東部) の特徴

- ・ Canary Wharf や The City など、ロンドンの経済を支えている金融エリアに近い。また、ロンドンの中でもとりわけ多種多様な人種が住んでいるイーストエンドにキャンパスがあり、以前は貧困層が多いイメージがあったが、2012 年のオリンピックを期に再開発が進み、現在ではアートやファッションなど、ロンドンの最新カルチャーを発信するエリアに変貌してきている。



賑わいを見せるイーストエンド

インタビュー項目

●ボランティア

- ①ボランティア活動の種類
- ②他の大学や組織との協力関係はあるか
- ③学生のボランティアに参加するモチベーションを高めるために、何か特別な取り組みをしているか
- ④その他（補足があれば）

●インターンシップ

- ①インターンシップの種類
- ②インターンシップがカリキュラムに組み込まれている学科はあるか
- ③他の大学や組織との協力関係はあるか
- ④既存のインターンシッププログラムは、学生の地域への関心を増幅させていると感じるか
- ⑤インターンシッププログラムをどのように改善しているか
- ⑥その他（補足があれば）

3. 調査結果

以下に、インタビューで得られた各大学担当者の回答を掲載する。

●ボランティア

①ボランティア活動の種類

ウォーリック

主に以下の3種類がある。

- **School Programme** → 学生が地域（コヴェントリー市内）の学校に行き、子どもたちに算数や英語や科学等を教えるプログラム。現在、48校で活動している。
- **One-offs Volunteering** → 1度限りなど、短期間で行うボランティア活動。特別な知識や技術を要しないため、多くの学生が気軽に参加しやすい(例: コミュニティパークの花の植え、老人ホームでのお茶会、運河の掃除等)。
- **Student-led Programme** → 学生が主導となって活動内容を決めて行うプログラム(例: 子どものスポーツ指導、地域のソーシャルネットワークイベントの補助等)。学生のリーダーシップやプロジェクトマネジメント能力を養うことを目的としている。

ヨーク

年間1,400名の学生が地域のボランティアに関わっている。(キャンパス内でのボランティア学生を除く。) 主要なプログラムは、以下の2種類がある。

- **YSIS(York Students in Skill)** → 年間700名の学生が参加している。学生が学校で授業をすることで、生徒たちが憧れを持って大学に行きたくなる、生徒のよいロールモデルになる(Widening Participationの観点からも良いプログラム)。
- **@Work** → 他の学生と協力して、チームで活動するプログラム(例: 学生がヨーク市内のチョコレート工場の歴史について作成したショートフィルムがBBCで放送された)。特に、文系の学生に人気。理由は、理系の学生はラボでチームで実習するが、文系の学生はそのような機会が少ないため。

クイーンメアリー

主に以下の3種類があり、年間約900名の学生がいずれかのボランティア活動に参加している。

- **Online brokerage service** → クイーンメアリーのウェブサイト上に登録してあるプログラム。期間の短いプログラム/長いプログラム、複数回に及び活動するプログラムなど、様々なプログラムが登録されている。ウェブ上で検索・登録が手軽にできるため、忙しい学生に人気。
- **1day volunteer programme** → 大学側が主導となって学生に募集をかけて、ロンドン市内で

開催されるチャリティイベント等に学生を参加させる1日（1度）限りのプログラム。各イベントの規模に応じて、5～80人のグループの学生をイベントに参加させている（例：ロンドンマラソンでのチャリティ支援、コミュニティセンターでのホームレスへの食事提供等）。年間50種類のプログラムを提供。

- ・ **Volunteering Groups Programme** → 学生が主導となってグループを結集し、自分たちで発案したプログラムを大学からの活動資金を元手に活動するもの（例：小児病院や学校、老人ホーム等での活動）。現在、15のグループが大学側から活動資金を得ている。

②他の大学や組織との協力関係はあるか

ウォーリック

コヴェントリー大学と共同で以下のプログラム及び意見交換会を行っている。

- ・ **Joint Volunteer Programme** → コヴェントリー市内のどこの学校に学生を派遣するかを2大学間で話し合っって割振りを行い、学生に授業を行わせるプログラム。
- ・ 意見交換会 → 年に2回、2大学のボランティア関係部署（学生側ではなく、大学側の組織）が集まり、双方の近況報告及び共同活動の可能性等について話し合いの場を設けている。

ヨーク

- ・ ヨーク市内の500の機関（チャリティー団体、ミュージアム、学校等）と協力関係がある。他大学との共同プログラム等はないが、企業側からの募集要件にふさわしい学生がいない場合、企業側に近隣の他大学を紹介する場合がある。（例：アート系の学生を募集している場合、同分野に強みを持つヨークセントジョン大学を紹介する、等）

クイーンメアリー

Student Volunteering Network(UK全体のネットワーク)の中の地域別組織“London Network”にQMSUも加盟している。

- ・ 178のチャリティーパートナーと関わりがある。
- ・ ミーティングでは、他の大学のボランティアグループとのコラボレーションや情報交換を行っている。
- ・ 毎年、London Student Volunteering Fortnightを開催している。⇒London Networkに加盟している5,6の大学の共催イベントで、参加学生に2週間のボランティア活動の機会を提供している。ロンドン大学に属するすべての学生が参加可能。

③学生のボランティアに参加するモチベーションを高めるために、何か特別な取り組みをしているか

ウォーリック

- **Create a Project Competition** (サンタンダール銀行による資金援助) → サンタンダール銀行の資金援助を受けて、毎年、学生からボランティア活動計画を募り、最大で 10 位まで受賞作を決める。受賞した活動には、銀行からの資金を等分して活動費を支給する。受賞作は大学スタッフと銀行職員で話し合っ決めて決める。

ヨーク

- **York Award** → 1998 年にスタート。アウトリーチ・アクティビティ (課外活動) を通じて学生のエンプロイアビリティ¹向上を促す目的で設置。ボランティア活動だけではなく、インターンシップも対象としている。学生の将来の職業への意識付けや雇用に直結するスキルの育成に焦点を当てている。York Award に申請したい学生は、大学事務の担当者に申請書を提出し、大学側で受賞の可否を決定する。受賞対象は、新入生とその他で分けている。

学生の活動を評価する際に、活動の量 (活動時間や種類) よりも質 (実際に何をしたか) を重視している。また、活動内容の重要度は個々の学生によって異なるため、申請時にタイトルだけで却下することはしない。例えば、将来ジャグラーになりたい学生がいるとして、それに資する重要な活動をしていると審査側を納得させることができれば、同学生は York Award を取得できる。

現在、York Award に申請した学生のうち、約 90 パーセントの学生が認定を受けている。

クイーンメアリー

- 2 つの Volunteering Award を設けている。
 - a) **Hours Award** … 25hours (ブロンズ)、50hours (シルバー) 100hours (ゴールド) ⇒ ウェブサイトで各自が申請可能。
 - b) **Special Award** … Volunteer of the year (全てのボランティアが対象), Leaver volunteer of the year (最終学年の学生が対象), New volunteer of the year (新入学生が対象), Volunteering Group of the year (グループで活動するボランティアが対象) ⇒ それぞれ受賞者数は 1 名 (1 グループ) ずつ。他学生の推薦を受けて、2 つのキャンパス (マイルエンドキャンパス及びホワイトチャペルキャンパス) の学生代表 2 名が協議をして受賞者を決定する。
- **デンタルカリキュラム**

歯学科の学生は卒業までに 10 時間以上のボランティア活動をすることがカリキュラムに含まれている。どんなタイプのボランティア活動でも可 (デンタルに関連しないものでもよい)。

2016 年度は 227 名の学生が参加予定。

¹ エンプロイアビリティの定義: エンプロイアビリティには様々な定義があるが、本稿では、Mantz Yorke(2004)による次の定義を採用する。「エンプロイアビリティとは、高等教育機関の卒業生の就職と彼らの選択した職業での成功をもたらす可能性のより高い、スキル、理解力、及び個人的特性の一連の学力である。それらは、彼ら自身、労働力、コミュニティ及び経済の利益となる」。

④その他

ウォーリック

- ・ボランティア活動は、学生の心と体の健康に良い。また、活動を通して他学生・地域の住民等、交流の輪が広がる。

ヨーク

- ・ボランティア活動は、**Widening Participation** の観点からも良い (①でも触れている)。
(例： 親の収入等を背景に学校に行く子どもが少ないエリアの出身の学生が母校を訪れて、自身の大学生活の様子や授業料補助制度等を生徒に伝えることで、自分たちも大学に行きたいという思いを持たせることができる。)
- ・学生がボランティアに参加する動機として、以下のことが挙げられる
 - a) 自分の得意分野・不得意分野を知り、どのような仕事に向いているか、またその仕事に就くためには何が必要か等を知ることができる。
 - b) CV に書くことで、就職時に有利。
- ・**York Award** は留学生も申請可能であり、彼らはボランティア活動等を通じて地域の人と関わり合うことを楽しんでいる。

クイーンメアリー

- ・学生がボランティアに参加するモチベーションとして、「他学生との違いを作りたい、自分自身の強みを発見したい、エンプロイヤビリティを高めて就職に活かしたい」と話す学生が多い。

●インターンシップ

①インターンシップの種類

ヨーク

- a) フルタイム (夏休み期間に開催。週 40 時間を上限として 8~12 週間勤務。)
 - b) パートタイム (学期中に、正規のカリキュラムの合間に開催。週 20 時間を上限として 10~12 週間勤務。)
- a), b)ともに従業員数 50 名以下のスモールビジネスでのインターンシップが人気。内容としては、ソーシャルメディアが人気である。我々は“**Same Skill, Different Business**”という言葉をよく使う。ホテルやフードプロダクトなど、職種は違ってもそれらに共通して重要なスキル、いかなる職種にも活かせるスキル (トランスファラブルスキル) がある。トランスファラブルスキルは時代によって変遷するが、現在は情報発信機能としての **Facebook** 等、ソーシャルメディアを使いこなすスキルが、あらゆる職種で求められている。

クイーンメアリー

1年を通して4種類のプログラムを学生に提供している。現在、年間450名の学生がインターンシップに参加しているが、その数を2019年までに年間1,000名以上にする目標を掲げている。

- ・Q Projects… 週に1回のペースで3ヶ月間、地域のチャリティ関係企業のもとで、チャリティ活動団体の運営手法を学ぶプログラム。
- ・Q Temps… キャンパス内や地域における比較的小規模の職場で、特殊な知識や技能を要しない基本的な内容の業務を数回行うプログラム。年間約200名の学生が参加している。
- ・Q Interns… Q Tempsとは対照的に、銀行における業務など、より専門的な知識を必要とする業務を大小さまざまな規模の職場で約3ヶ月間行うプログラム。
- ・Q Consult… JPモルガン銀行からの資金援助によって運営されているプログラム。インターンシップの内容は銀行業務に限らず、成長産業のコンサルタント業務に携わるプログラム。チームで働く経験が出来る。年間約140名の学生が参加している。

②インターンシップがカリキュラムに組み込まれている学科はあるか

ヨーク

ない。

クイーンメアリー

いずれの学科にもカリキュラムに組み込まれていない。

③他の大学や組織との協力関係はあるか

ヨーク

ヨーク市役所等、市内の政府機関との協力関係はあるが、他大学とは特にない。

クイーンメアリー

ロンドン大学に属する各大学で構成される Careers Group 内の連携を密にして、共通のポータルサイト上でインターンシップの求人情報等を共有している。

④既存のインターンシッププログラムは、学生の地域への関心を増幅させていると感じるか

ヨーク

増幅させていると思う。インターンシップ後のフィードバックで、卒業後にヨーク市内で働きたいと話してくれる学生がいる。その中には、市外から来ている学生もいる。

クイーンメアリー

そのように感じる。キャンパスがロンドンにあるため、地方の大学と比べてキャンパスの近辺に多国籍企業や英国全土に進出している規模の大きな企業が多く存在する。多くの学生はそれらの企業に目を向けやすいが、地元企業へのインターンシップを通じて、地域に根ざした職場で働きたいと思うようになった学生の声を耳にする。

⑤インターンシッププログラムをどのように改善しているか

ヨーク

- ・実施後、学生と企業双方からアンケートを取り、プログラムの改善に役立てている。その多くはポジティブな意見が多いが、中には、インターンシップ開始時及び終了時のペーパーワークをもっとシンプルにしてほしい（企業側からの意見）、給料を月毎ではなく週毎に支払ってほしい（学生側からの意見）などの意見もあり、すぐには実行に移せない案件でも、徐々に改善出来るように常に意識している。
- ・時代の多様なニーズに沿う形で、インターンシップをより実行しやすくするために、例えばスカイプを使ったインターンシップも取り入れている。

クイーンメアリー

- ・インターンシップ経験者および受入企業双方からアンケートフォームを **Email** で送ってもらい、プログラムのフィードバックに役立てている。また、英国の労働市場のトレンドを把握するために、関連するカンファレンスに出席したり、新聞・雑誌・インターネット等あらゆる情報媒体から情報を得るよう心がけている。

⑥その他

ヨーク

- ・我々は、希望のインターンシップに採用されなかった学生のフォローアップもしている。例えば、企業側から1名のオファーが来ている職に対して20名の学生が申請してきた場合、志望動機が明確でCVの書き方が優れている5名程度を企業側に推薦する。志望動機やCVの書き方に問題がある学生15名、それらの条件はクリアしているが最終的に企業側に選ばれなかった学生4名、それぞれの段階に応じてキャリアアドバイザーの指導を受けさせている。
- ・インターンシップは、学生側と企業側、双方にメリットがあると考えている。
 - a) 学生側のメリット… キャンパスの外で新しい経験をする。将来就職したい職種が求めているスキルやトランスファラブルスキルを学べる。自分を見つめ直す機会が得られる。
 - b) 企業側のメリット… （本格的に採用するわけではないため）雇用契約がシンプルで即時的に

活力がある若い学生を受け入れることができる。流行に敏感な学生から最近のトレンド情報を得ることができる。

- ・ローカルビジネスを助けることが重要であり、「ビジネスがあって、学生がそこで働く。」という認識を持っている。

4. 考察

●ボランティア…「賞」で学生のやる気を後押し。地域のコミュニティや他大学等とのネットワークを重視。

- ・ボランティア活動の種類は、3 大学でスクールでのボランティアが、また 2 大学で学生のグループワークや学生主導のプログラムが共通して各大学に取り入れられている。グループワークは、ヨーク大学の担当者の回答より、「特に文系の学生に人気がある。理由は、理系の学生はラボでチームで実習するが、文系の学生はそのような機会が少ないためである。」とのことだった。また、短期（1 日限りあるいは 1 回限り）のプログラムを導入することで、長期のまとまった時間を取りづらい学生にも参加しやすいように工夫している。
- ・各大学とも学生のボランティア参加を促す「賞」を設けているが、「大学側はあくまでも学生の自主性に基づいた活動を促すように支援することが肝心（大学側からの強制・トップダウンではなく、学生側からのボトムアップが大事）であり、押し付けであってはならない」と各大学担当者が答えていたのが印象的だった。
- ・賞において、受賞対象の細分化について大学間で相違が見られた。ウォーリック大学では受賞対象を特に分けていないが、クイーンメアリーとヨーク大学では新入生や最終学年、グループなど受賞対象を細分化している。
- ・賞における学生のボランティア活動時間に対する捉え方も大学間で相違が見られた。クイーンメアリーでは、時間数に応じた賞を設けているが、ヨーク大学では、「活動の量よりも質を重視している」ため、活動時間数は特に重要視していない。
- ・賞を決定するプロセスについても、各大学で相違が見られた。ヨーク大学の York Award は大学側が賞を認定するのに対して、クイーンメアリーの Special Award は、2 つのキャンパスの学生代表が話し合い、各受賞者を決定する。
- ・クイーンメアリーのデンタル科では、3 大学で唯一ボランティア活動をすることがカリキュラムに含まれている。ただし、ボランティアの内容はデンタルに関連するものでなくてもよい。
- ・ウォーリック大学とクイーンメアリーでは、近隣の大学との共同プログラムやイベントを実施しており、大学間の横の繋がりが見られた。

●インターンシップ…「学生個人のスキル向上」を重視しているが、地域の企業側にも利益あり。学生のそれぞれの段階に応じたの細やかなサポート。

- ・クイーンメアリーの「ロンドン大学内での共通ポータルサイト」に見られるように、「他の大学

と情報を共有する」程度の連携はあるが、ボランティアのように共同イベントを開催するなど、より積極的な他大学との連携は感じられなかった。これは、インターンシップは「学生の就職」を促すことに力点を置いており、他大学と学生の就職を競い合うという側面があるためだと推察する。

- ヨーク大学では担当者の「**Same Skill, Different Business**」の発言のとおりトランスファラブルスキル（あらゆる職種に共通して必要なスキル）の習得を重要視しているが、クイーンメアリーではプログラムを細分化して、基本的なスキルを身につけるプログラムだけでなく、専門的なスキルを身につけるプログラムやチームで働くプログラムなども設けていた。
- クイーンメアリーでは、現在年間 450 名の学生がインターンシップに参加しているが、その数を 2019 年までに年間 1,000 名以上にする目標を掲げており、インターンシップに参加する学生を増やそうという、大学側の明確な意思が感じられた。
- ヨーク大学及びクイーンメアリーとも、既存のプログラムが学生の地域への関心を増幅させていることに一定の手応えを感じているようであり、スカイプを使ったプログラムなど、時代の多様なニーズに沿う形でプログラムの改善を進めている。
- ヨーク大学では、企業からのインターンシップ募集で採用されなかった学生に対して、CV の書き方の指導や面接練習など、それぞれの段階に応じて、キャリアアドバイザーの指導を受けさせている。
- ヨーク大学の担当者によると、インターンシップは学生側の利益だけではなく、企業側も恩恵を受けている。企業側の利益としては、「雇用形態がシンプルで即時的に活力がある若い学生を受け入れることができる。また、流行に敏感な学生から最近のトレンド情報を得ることができる。」などが挙げられる。

●ボランティア及びインターンシップの共通事項

- ボランティア及びインターンシップともに、銀行からの資金援助を受けて運営しているプログラム（ボランティア…ウォーリック大学の **Create a Project Competition**、インターンシップ…クイーンメアリーの **Q Consult**）があり、企業からのサポートが見られた。

5. 総括

学生がボランティア活動を通じて地域に関わるモチベーションを高める目的で「賞」を設定する際、あくまでも「学生の主体性を尊重する」という前提に立った上で、受賞対象の細分化、「時間数」の捉え方、受賞者決定のプロセスにおける大学側と学生の関与のバランスなどに配慮する必要がある。カリキュラムにボランティア活動を組み込む場合、学生の自主性及び主体性の保持の問題がある。学生に「やらされている感」を抱かせないように配慮する必要がある。また、近隣の他大学等との共同プログラムやイベントを企画するなど、大学間の横の繋がりも重要だと思われる。

インターンシップにおいては、プログラムの細分化を行う際、トランスファラブルスキルと専門的なスキルをどのように考慮するか、時代のニーズや地域の企業から真に求められている能力は何かを意識的に情報収集して、プログラムの改善に活かしていくことが重要である。また、学生のそれぞれの段階に応じてのきめ細やかなサポートも必要である。

今回の調査では、ボランティア活動における「賞」が実際にどの程度学生のモチベーションを高めているか、或いは既存のボランティアやインターンシップのプログラムがどの程度学生が地域に関心を向けることに繋がっているのか、大学担当者の意見を聞くに留まった。今後、本調査を進める際には、大学側だけではなく学生にも聞き取り調査を行うことで、大学側の思惑が実際にどの程度機能しているかを把握できると思われる。

謝辞

本報告書作成にあたりインタビューにご協力頂いた英国の大学関係者の皆様、竹安センター長、大萱副センター長、松本前副センター長をはじめ JSPS ロンドン研究連絡センターの皆様、JSPS 東京本部の皆様、私の所属大学である島根大学の皆様、その他本研修でお世話になった皆様に心より御礼申し上げます。

参考文献及びURL

(URLのアクセス日は全て 2016年2月26日)

- ・研究会報告「イギリスにおける大学インターンシップの現状」 藤田 実
- ・NII – Electronic Library Service 第2章 イギリス 教育の専門職化を目指して－英国における大学教員の資質向上の取組
－ 川嶋 太津夫
- ・島根大学広報誌 広報しまだい 2016.1 Vol.27
- ・学生の力を地域社会へ開放－サービス・ラーニングの展開とその実践－ 林 憲和
- ・「地域活性化ボランティア教育の深化と発展」： サービス・ラーニングの全学的展開を目指して 桜井 政成
- ・国立教育政策研究所紀要 第135集 イギリスの大学におけるエンプロイヤビリティ向上への取り組み－ヨーク大学の「ヨーク賞」プログラムを通して－ 多田 順子
- ・アクティブ・シチズンシップを育てるグローバル教育－イギリス市民性教育 Get Global!の場合－ 藤原 孝章
- ・The Times Good University Guide 2015 John O'Leary
- ・Science Portal
http://scienceportal.jst.go.jp/reports/britain/20120801_01.html
- ・一般社団法人日本スタディアブロードファンデーション
<http://www.japanstudyabroad.org/?p=420>
- ・福祉と介護のみんなでネット
<http://www.geocities.jp/minna1293/21bora.html>
- ・学生の地域貢献－単位認定化を中心に－ 手塚 眞 福土正博 安川隆司
http://www.tku.ac.jp/kiyou/contents/economics/265/155_Teauka_Hukushi_Yasukawa.pdf
- ・Employability in Higher Education: what it is - what it is not', Higher Education Academy/ESECT
[http://www.employability.ed.ac.uk/documents/Staff/HEA-Employability_in_HE\(Is,IsNot\).pdf](http://www.employability.ed.ac.uk/documents/Staff/HEA-Employability_in_HE(Is,IsNot).pdf)
- ・The Dearing Report (1997)
<http://www.educationengland.org.uk/documents/dearing1997/dearing1997.html>